

編集後記

「臨床評価」の本号は第34巻目に当たり、よくも長年続いたといまさらながら感慨にふけっている。創刊当時からの方針は、梁山泊に集って交わした薬の開発をいかに進めるべきかの激論を実際の動きにつなげるといふ同士の志をこの雑誌という場において実体化するといったもので、その編集方針を根気よく続けてきた。私が引き続き編集長であったことにはいろいろと異見もあったことだろう。だが、あえて気張らずみなを志を尊重することによって、大きな破綻は避けられたのではないかと、などとぼんやり考えている。無能な私だったから、かえってよかったのかもしれない、などと開き直ってもみるのである。

この雑誌の創刊当時は、新薬の申請データが紙面の最重点になっていた。臨床試験には、公平な立場から第三者が参加すべきだというわれわれの考えに、製薬会社の開発部門の中にも賛同してくださる方々も多かった。それによって研究的な立場が深まり、細かい技術的な問題にも目が行き届き、また試験をわれわれに依頼する方向に積極的に働いて下さった方々も多かった。われわれは自身の立脚点をむしろアンチ権力とっており、情報をわかち、解析の過程を明示化する立場を徹底していたのだが、しかしそれを権力志向とやっかむ批判もあったと聞いている。フルグループな統計解析に徹底することによって、中小の製薬会社の開発部門の発展に寄与してきた。しかし高次な統計解析を行わないコントローラー委員会は遅れていると批判する向きもあり、解析専門家と称する人たちが抜け駆ける的に企業に売り込むことも目にしてきた。もちろんそれを妨げるつもりもないが、それによって第三者性や公平性の担保の必要性の自覚がないがしろにされ、自前の解析に頼ろうとする傾向も目立ってきた。何せ日本はオートマルキー的な国なのである。

出来るだけ生データに近いものを、またすべてのデータを都合がよからうが悪からうが開示する、開発の失敗経験もペーパー化させるといったわれわれの努力は、貧弱ながらいくつかの果実として実ったが、それを避けたがる会社も多くなり、また当局にもそれを黙認する動きもあったようである。FDAの方針にはそのまま右倣えだが、臨床の専門家をいかに育成するかという点には目が行き届いていない。かくて臨床の現場が忘れられ、いたずらに薬理現象についてのトリヴィアルな議論にこだわりすぎることによって、薬の許認可が大幅に遅れる事態を招いている。ピカ新の薬剤の開発には不利な環境になっているのである。

この雑誌は、発刊当初から広告収入に頼らない方針であった。薬の臨床解析そのものが少なくなった状況から、経済的にどこまで続けられるか編集長として不安に思ったこともあった。まだ多少の蓄積はあり、当面は地の塩でありたいやせ我慢の方針を貫き続けるつもりである。

われわれの発刊当初からの同志も、何人かは鬼籍に入り、病のため引退する気持ちを表した方々もいた。しかしながら不思議なもので、われわれの気持ちに賛同し、本刊行会に力を加えて下さる気鋭の方々も新たに数多くあらわれ、編集長としては大変心強く思っている。新たなメンバー構成について、本号の奥付を参照されたい。

ここで思い起こされるのが「たゆたえども沈まず」というパリ市を評する言葉である。幾たびもセーヌ河をさかのぼって襲来した蛮族に耐え、二千年近くも生き延びてきたパリはセーヌ河に浮かぶ舟形として市の紋章を採用している。「臨床評価」をパリ市に喩えることはおこがましい自画自賛であるが、「ゆらぎ」に身を任せつつも、われわれの編集方針を堅持し続けたい気持ちを新たに示すものである。

(栗原雅直)